

暴力と萬歳 : 戯曲

著者	石川, 一雄
雑誌名	龍南
巻	2 1 1
ページ	1 1 3 - 1 2 7
発行年	1929-12-10
その他の言語のタイトル	暴力と万歳 : 戯曲
URL	http://hdl.handle.net/2298/6908

暴力と萬歳

石川一雄

第一幕

I

映畫監督 城津

女 優 瑞子ミズ

男 優 瑞子の夫。石見イミ

その妹 しづ子

石見の家の二階の一室。上手は襖障子。下手は壁。それに女の衣裳がだらしなくぶらりと掛けてある。その壁の傍、後方に鏡臺、その上に色々の化粧品。正面は硝子戸で、兩側に開けられ、外側は板の縁で欄テウリがある。外は闇。だがぼんやりと、近所の屋根と、遠くの電燈の光が見える。

室の中央に應接机。その上には酒その他。幕開くと、城津と瑞子。

瑞子 今夜暑いわね。ほんとに。(團扇を使ひながら)

城津 それはいゝが、石見は歸らないのかい。本當に。

瑞子 まあくどいわね。先生は。兄妹とも夜間撮影で夕方から出かけちゃつたわ。早くても十二時よ。

城津 さうか。

瑞子 (杯をさしながら) 石見なんかかまやしないわ。先生はあの人が恐いの？

暴力と萬歳

城津 いや石見なんか兎に角、噂がうるさいからね。

瑞子 あら先生。薄情ね。

城津 誤解しちゃ困る。うん飲むよ。さあつけ。十二時までだ。

瑞子 ほゝゝゝ。奥さんが氣になるんでせう？

城津 ふん、あんなリユウマチスは豚に食はれろだ。(二人暫く沈黙)

城津 (杯を瑞子にさしながら) だがみいちゃんも變つたね。僕が初めてみいちゃんに會つた時、小さくなつて言つたらう。」あ

たしでもスタアになれるかしら」つてね。(女のまねで)

瑞子 ほほほほ。先生つたらいやな人。そんな話よしてよ。

城津 うふふふ。然し本當ぢやないか。その一年前の生娘が今ぢや押しも押されぬスタア様。

瑞子 ねえ、先生。(杯を返して媚びて)

城津 いや解つた。解つた。今度の「結婚秘帖」の主演だらう。そりや勿論……

瑞子 あら、先生。そんな話ぢやなくつてよ。

城津 ぢや何かい、金の指輪でも……

瑞子 ねえ先生。

城津 何だい？ 勿体ぶらずに言つてごらん。

瑞子 あの……あたしこゝがいやんなつちやつた。

城津 それで？

瑞子 先生。あなたあたしの言ふことをきいて下さる？

城津 そりや勿論僕に出来ることならね。みいちゃんのためなもの。

瑞子 それ本當？ 誓つて下さる？

城津 本當とも。

瑞子 それぢや言ふわ。

(この時、玄關の格子戸を開ける音。女と男の聲がする)

瑞子 あら。誰だらうか知ら。

城津 歸つたらしい。

瑞子 かまやしないわ。

(二人あわてゝ座を直し、容姿を正す)

(階段を登る足音。石見上手の襖を開く。そして驚いて立つてゐる。)

城津 やあ石見君。もう歸つたんですか。こゝに失禮になつてゐます。

瑞子 早かつたのねえ。

石見 (不快な顔で立つてゐたが、思ひ直してそこに坐る) ようこそ。

城津 今度僕の作る映画の主演について、みい：瑞子さんに相談することがあつてね……(辯解的だが幾分威壓的に)

石見 さうですか。ぢや私は失禮しませう。(立たうとする)

城津 いや、もうすんでしまつたよ。時に君達は今日は夜間撮影ぢやなかつたかね。

石見 はあ。さうでしたけれども、三津子さんが卒倒してしまつて中止になつたんです。

瑞子 三津子さんが卒倒したの？ あの人それ程熱心かしら。

石見 (怒つた様に) お前なんかより熱心さ。

瑞子 ほう。これは御挨拶ね。だけどあの人の畫なんか見られやしないわ。ねえ先生。

石見 自惚れるな。

(二人の様子の險惡なものにはらはらしてゐた城津、石見の機嫌をとる様に)

城津 時に石見君。君一つ僕の映畫に出演して呉れないか？ 瑞子さんと一緒に。

(この時しづ子が歌を歌ひながら階段を登る音)

石見 は。

(しづ子歌を歌ひながら近づく)

闇夜の林を

飛ばれぬこの身

あたら若さを

牢屋の中で……兄さん。姉さんは？(隣室から)

(しづ子上手から入る)

しづ子 あら城津先生。いらつしやいませ。(坐つて挨拶する)

城津 やあ。グッドナイト。撮影中止だつてね。(甘く)

しづ子 えゝ。三津子さんが倒れたの。あの人一生懸命ですもの。可哀さうに。

瑞子 えらい御同情ね。でも倒れるのが名譽ぢやないわ。あゝ、しづさん。あたしの衣裳たゝんでおいてよ。

しづ子 はい。(立上る)

石見 おい。しづ子は今夜疲れてるんだ。自分のものは自分で始末したらいいぢやないか。

しづ子 あら兄さん。疲れぢやゐないわ。いいの。わたしのもたゝむのがあるから。(しづ子壁にかけた衣裳を取り上手の襖から隣室へ行く)

城津 石見君。しづ子さんはいゝスタアになれるぜ。

石見 いや。しづはスタアになれる心配はありません。

城津 何故。

石見 いや。それは言はない方がいゝでせう。

城津 さうか。兎に角だね。君と瑞子さんと、しづ子さん三人を入れて一つ映畫を撮つて見たいと思ふんだが。出て呉れるだらう、君。

石見 命令なら仕方ありません。私は雇はれてゐるんですから。

城津 命令と言ふわけぢやないよ。だが承諾して呉れるんだね。しづ子さん。あなた聴きましたか？（隣の室へ向つて）

しづ子 えゝ。ようございます。（隣室から）

城津 よし、これで話がきまつた、と。では失禮しよう。（立上る）

石見 さうですか。では左様なら。

瑞子 またお暇の時はどうぞ。何もなくてすみませんでしたわ。（立上り、城津の後を送つて行く）

城津 打ち合せは又後で通知しますからね。では失敬。（上手隣室へと）

石見 は、よろしく。

（隣室からしづ子の聲。） もうお歸りですの。先生。

城津の聲。 しづ殿さらばぢや。はゝゝゝ。

瑞子の聲。 いゝわ。しづさん。あたしお送りするわ。階段を降りる音

石見 畜生！（深く考へ込む）（立つて上衣を脱ぎ初む）（暗轉）

II

石見の家の玄関。正面、格子戸。下手、竹の垣。上手も同じ。垣には朝顔が這つてゐる。電燈無く薄暗い。

瑞子（格子戸を開けて出る。續いて城津。瑞子城津の側に寄り）駄目だつたわね。またいつかどうぞ。

城津（肯いて、次に瑞子を抱き接吻し、急に改まつて）どうもお邪魔しました。どうぞお願ひして置きます。では…

瑞子 いゝえ。おかまひもせず。（改つて言ふ。空を見て）雨が降りさうですけど傘は…

城津 春雨だ。濡れて歸らう。はゝゝ。では…

（二人目で笑ひながら別れる）

（瑞子。暫く見送り玄関に入り格子戸を閉める）

（暗轉）

III

Iの最後と同じ。石見荒々しく洋服の上衣を抜いてゐる。しづ子は杯その他をかたづけしてゐる。瑞子入つて来る。

瑞子 あゝあ。くたびれちやつた。（鏡臺の前に坐り髪形や、顔を直す）

石見（瑞子の姿を怒つて見やり）しづ子、お前下に行つて居て呉れ。姉さんと相談したい事があるから。（やさしく、だが幾分

荒い味がある）

しづ子（兄の顔をさぐる様に見て、その意を覺り哀願する様な眼）

石見 早く行け。

しづ子（仕方なく杯その他を持つて隣室へ。そして襖を閉める）

（二人暫く沈黙。石見は上衣を脱ぎ坐る）

石見 おい。たま子（瑞子の本名）こちらに來い。

瑞子 何なの？（ふり返る）

石見 お前、良心があるなら自決しろ。

瑞子 まあ、自決ですつて。自決つてどうするの？

石見 いや。おれは洗ひだてすることはせぬ。自分の心に聞いて見ろ。

瑞子 さあ。あたしには解んないわ。何のことやら。

石見 おい。正直に言つて呉れ。おれは氣が短いから。

瑞子 でも何のことやら解んないわ。(又鏡に向ひ化粧にかゝる)

石見 (とうとう怒つて) 白つばくれるな。おれが知らないとしても思つてゐるのか。自分で言はなきやあばいてやる。城津はどうした。

瑞子 まあ、城津先生のことだつたの。あの人あたしの先生ぢやないの。家に相談に来る位あたりまへだわ。

石見 (幾分自制して) おれはこれ以上争ひたくない。自決して呉れ。

瑞子 自決つてどうするの？ (立上る)

石見 この家に居るか、出て行くかをきめるのだ。

瑞子 あたしこの家を追ひ出される程悪い事をした覚えが無いわ。

石見 おい。本當を言へ。おれはどつちつかずの生活は嫌いだ。

瑞子 (黙つて坐る)

石見 お前、不道德なことをしても良心の苛責は無いのか？

瑞子 不道德ですつて？ 不道德！ あの人あたしの先生だわ。恩人ぢやないの。

石見 (遮つて) 恩人！ さうか。では恩人だから……

瑞子 ええ。あの人あたしをスタアにして下すつたわ。

石見 そしたら、お前が故郷から出て来た時、誰がお前を助けたんだ。

瑞子 恩にきせるの？

石見 恩にきせようとは思はない。然し人間てさうしたものぢやない。夫に秘密に他の男と交るなんて、そりや人間の道ぢやない。若し嫌ふならさつぱり言つて別れたらいい。

瑞子 ぢや別れませう。あたし、あなたの様な固い人は嫌ひです。あたしはあたしの道を行います。あたしはあたしの人氣とあたしの顔が一番尊いものです。あなたは……

石見 よし！ これでおしまひだ。いつかはお前も目がさめるだらう。人間は名譽のためにのみ生きてるもんぢやない。

瑞子 もう言ふことはそれだけ？ (立上つて)ではさよならよ。もう。

石見 城津にさう言へ。「約束通り結婚秘帖に出演する」つて。(立つて正面の硝子戸の方へ)

瑞子 (荒く)ええ。言ひますとも。(隣室へ)

(荒々しく階段を降りる音。次いで下からしづ子の聲。又荒々しい階段の音。)

しづ子 (走り込んで来て、兄に) 兄さん。兄さん。姉さんどうしたの。

石見 (外を見てゐたが、振返つて)しづ子。これから二人だ。(驚いて呆然と立つたしづ子の方へ寄り)さ。お茶でも飲まう。(二人隣室へ行きかける)

第二幕

— 幕 —

石見 (役名小二條武夫)

城津

瑞子（役名えいちゃん）

しづ子

その他キヤメラ・マン、監督^{アシスタント・ディレクター}、助手、カフェの客に扮装した男優。女給に扮した女優。

スタゲオ内、ダーク・ステイザ内のセツト。カフェの夜の場面。正面、硝子戸で色々の装飾。上手、奥にカウントアのある氣持、女給達が出入るので知れる。下手、奥に入口のある氣持。客の出入で知れる下手前方に、キヤメラが上手に向ひ斜方向に置かれてある。その側の右側（上手側）に城津が片手に臺本、片手にメガホンを持つて立つ。キヤメラ・マン及び二三の必要な人。舞臺面には白いクロースをかけたテーブルが澤山。その他花瓶、鉢植、椅子、等の小道具は言ふまでもなし。石見はモダアンな西洋風。瑞子は妖艶な女給姿。しづ子は純真な女給姿。石見と瑞子は中央前方、キヤメラの正面に當るテーブルに向ひあつて坐る。幕開く前より蓄音器のジャズ小唄小さく。幕急に開くと、城津が演技^{アクター}をつけてゐる。

城津 君々。石見君。その寶石の箱^{ケース}を瑞子さんに渡す時、テーブルの上に投げ出すんだ。手渡しちやいかん。

石見 ですが、手渡した方がこの時適當ぢやないでせうか……

城津 いや、いかん。投げ出すんだ。それから兵藤さん。（女給に扮した一人）あなたはもつとしやんとしてこんな具合に歩くんです。

兵藤 はい。

城津 よし。ではいゝですか。（キヤメラ・マンに言ふ。キヤメラ・マン肯く）さあ始めますよ。自分の元の位置について。（人々動く）（頃を見て）アクトー！ ハイツー！（キヤメラは廻り初め、人々は演技を始む。その人々の小聲）

石見（演技を始めて） えいちゃんが好きなのを持つて來たんだがね。（ニヤニヤと）

瑞子 あら、なあに？ いゝものつて。（甘へて）

石見 さあ何だらうね。

瑞子 ひどいわ。たあさんは。しとをいじめて…

石見 では目をつむつておいで。（瑞子笑ひながら目をつむり手で蔽ふ）

城津（急に）ストップ！ 兵藤さん。あなたどうしたんですか？

（さう言つて居る中に兵藤（女給に扮した一人）は倒れる。側の男優驚いて抱き止め、「先生駄目です」と叫ぶ。人々その方に寄る。勿論石見もしず子も。瑞子は目をあけて冷淡に坐つたまゝ）

城津 また卒倒か。一体もう何人目だ。今日だけで。フィルムを食ふ奴ばかりぢやないか。（獨言の様に言つて）早川君、（監督助手）早く行つて、大部屋の女を一人交渉して來て呉れ。都でも梅谷でも誰でも女給向きの奴を。（この間に兵藤は人々に守られて下手へ。早川も走つて下手へ。舞臺には石見と他に四五人の男優と三四の女優、それにキヤメラ・マン、城津、その他三四人）

城津 一つ新鮮な空氣でも吸ひますか。このダーク・ステエヂと來たら埃と炭酸ガスが一杯ですからな。（キヤメラ・マンに向ひ言ふ）

キヤメラ・マン ほんとに無理はございませんね。女の方々がお倒れになるのも。（二人上手へ）

城津（行きがけに）瑞子 さん、あなたも倒れつちまいますよ。外に出て休まないで。

瑞子 えゝ。休みませう。

（二人去り、その後を瑞子が追つて行く）

（この間女優達は或者は疲れて椅子にぐつたり腰掛け、又或者は椅子に腰掛けて小聲で話し合ふ。男優達は一つのテーブルに集り小聲で話し乍ら煙草を吸ふ。石見もその側に居る。城津と瑞子が去ると皆聲が大きくなる）

男優A 英ちゃん（石見の愛稱）今日は散々いぢめられるね。（石見笑つてゐる）

B なあに、あの監督殿は英ちゃんを憎んでゐるのさ。瑞千嬢の件でね。はゝゝゝゝ。

C 瑞千さんはあの城津の第二號になつたつてね。何でも城津の奥さんは子供と淋しく暮してゐるつて事だよ。可愛想に……

D はゝゝゝ。一人空閑を守るか。あの先生も罪つくりだよ。

E おい、おい、おい。諸君！（人々笑ひながら、「やあ正義派」と叫ぶ）諸君は、人間が何の目的で生きてゐるかを知つてゐるか！（冗談らしく立つて叫ぶ）

人々 ヒヤヒヤ。また始まつたぞ（大統領など叫ぶ。）はゝゝゝ……

E（得意になり）我々は食はねばならぬ。又種族の保存をせねばならぬ。これは換言すれば、自己の生を充實させ、更に子孫に生を傳へることである。

人々 うまいぞ。さうだ。

E では自己の生を充實させ、更に之を子孫に傳へるために如何なる規準、方法が必要であるか。こゝに於て、我々は社會を必要とする。社會こそ我々の生を充實させ、尙子孫にこれを傳へる最高の存在である。

人々 最高の存在である。（人々眞似る）はゝゝゝ。頑張れ。

E 諸て、社會は必然的に、個人に依り作られて、個人の上に位するものとなる。社會は個人の生活を正當に規定する。この社會の持つ個人に對する規定こそ、社會の本質である。この社會の規定を犯す者は社會への反逆者である。その反逆者は相當の刑罰を受くべきなり。

人々 いやう。辯護士。うまいぞ。はゝゝ。

E 今、諸君！ 城津を見よ。彼は彼の有する權力と地位を利用して、世の子女を泣かしめ或は辱かしめてゐる。剩へ彼は我々に對し不親切である。

人々 さうだ。さうだ。おいやめろ（等等）

(この時一人の女優石見に囁く)

E
(びつくりして椅子に坐る。滑稽だつたので人々笑ふ)(互に囁き合ふ)

城津（にやにやと意地悪く）君。王君。何を言つて居たんだね？

一寸、話すことがあるから來て呉れ給へ。(E、心配して立上る。と、石見すつくと立つて城津の方へ)

城津 君ぢやない。君に用は無いよ。(皮肉に意地悪く)

城津（石見にかまはず、玉に向つて）E君。來て呉れ給へ。一寸でいゝ。

(石見城津に迫る。瑞子中に入り)

石見　こら。いらぬ邪魔だ。（瑞子を押しのかける）

石見　あなたは卑怯です。(叫ぶ)

城津 ほお、これは意外。卑怯呼ばはりは意外だ。君こそ卑怯ぢやないか。瑞子さんを勝手に追ひ出して、冤罪を人にきせるなんて……(嘲笑的に)

石見 (遮つて) 畜生! (殴りかゝる) 口でごまかすか。

電燈急に消ゆ。薄暗くなる。

城津の聲。(闇の中から) おい君。暴力は野蠻だ

女優達の聲 あら。大變! 大變! (甲高い聲々。走り行く足音)

男優達の聲 やつちまえ。色魔監督を。

おい。早く電燈つけろ。

(小道具の床に落ちる音。格闘の様子)

城津の聲。(苦しうに) 君。こら。鹹だぞ。

石見の聲。うゝん。これでもか。心を直してやるんだ。鹹が何だ。

(人々の足音遠くから走つて来る。)

電燈つけろ。電燈を。

(電燈急につく)

(石見亂れた服装で呆然と立つてゐる。城津は倒れてゐる。男優達はその周圍に立つてゐる)

(人々上手と下手から入り、呆然と立止る)

石見 (人々を見廻して) 皆さん。靜かにして下さい。僕は、この城津監督を暴力を以て倒しました。僕のこの行爲は野蠻的だつたでせうか。(暫く間) ですが僕は短氣です。それにこの城津監督はその口と權力で僕を嘲笑し、抑壓しようとしたのです。僕は仕方なく暴力を振ひました。(暫く間)

(人々囁き合ふ。人々の中から一人の立派な男が出て、石見の側に行きその肩に手をかけ)

男 君。もう解つた。さあ外に出て休まう。(目くばせで、人々城津を立たせ負つて行く)

石見 (男を見て) 僕はまだ人々に辯明して置く事があります。(男、石見の肩に手をかけて困つてゐる)

石見 皆さん。僕は今まで映畫のために働いて來ました。それはパンのためでした。僕はパンのために映畫俳優となりました。

もつと打ち明けて言へば名譽のためでした。然し僕は今は俳優の生活がどんなものであることを知りました。一体僕はどんな生活をしてゐますか。皆さん。(間)

男 君。もういゝよ。さあ諸君達もあつちに行きたまへ。(人々に)

石見 皆さん。僕はこんな空氣の中で休みなく働かされてゐる。

人々の中から。ヒヤヒヤ。

男 諸君。早くあちらへ行き給へ。さあ、さあ。

(人々互に顔を見合して去らない)

石見 そして作る映畫は何だ。社會に對し、人間の生に對し何の益も無い、唯害ある淫猥映畫か戰爭映畫かにすぎないぢやないか。僕は利益のみを目的とした映畫に働く事に良心の苛責を覺えるのだ。

人々の中から。さうだ。ヒヤヒヤ。

男 (やつきになり人々を追ひ拂はんとす) 諸君行かないのか。行かんか。行け。あちらに。(石見の側に寄り) おい。やめろやめろ。

(この時人々を押し分けて下手からしづ子走り出る。そして石見の手を取り) しづ子 兄さん。やめなさい。やめなさい。お願いだから。

(石見、しづ子を見て、次に人々に向ひ)

石見 皆さん。さよなら。

(石見下手へと行き始む。しづ子は兄を支へる様にして)

男優ABC、その他人々の中から。さよなら。

D (石見の側に寄り) 失望するな。前途ある身だ。(さう言ひながら三人下手へと)

男優A (思ひ出した様に大聲で) 英ちゃん、バンザイ。バンザイ。……

— 幕 —